

『増補〈世界史〉の解体…翻訳・主体・歴史』

酒井直樹・西谷修共著

以文社 二〇〇四年

『〈世界史〉の解体』という壮大なタイトルを持つ本書は、そのタイトルに恥じないパースペクティヴを有してはいるが、しかし決して「世界」の「歴史」について論じられた書ではない。もちろん「歴史」の問題は繰り返し徹底的に議論されてはいるが、しかし「歴史」という言葉が通常意味する時系列的な事象に関する議論ではなく、むしろ諸事象を「世界の歴史」として語るための認識(論)的諸条件とは何であり、それらがどのように構成されているのかをめぐって交わされた対話の記録である。そして本書で言われている『世界史』の「解体」とは、『世界史』が語られるための可能的経験を問い、その『世界史』において前提される「世界化」という運動の政治性をあぶり出し、対象化して歴史化することで、「現在」の様々な問題を批判的に考察する視点を提示することである。

もちろん「世界化」も一般的な意味で使われているわけではない。それはヨーロッパが十五世紀に支配圏域を非ヨーロッパに拡張したときに現れた「世界化」であり、十九世紀の帝国主義列強が植民地の獲得競争に鎬を削ることで現出した「世界化」であって、さらに近年グローバリゼーションあるいはアメリカ合衆国の一極支配とし

て語られる冷戦後の「世界化」である。つまり「西洋」が、近代と呼ばれる時代において、非西洋を「発見」して支配しつつ他者化することで自己確定し、帝国主義と植民地支配に至った「世界化」が祖上に上げられ、とりわけそうした制度を支える「西洋」に始原を持つ近代の「知」の構造と制度が、原理的かつ批判的に検証されているのである。

対話者は酒井直樹氏と西谷修氏である。米国で日本研究に携わる酒井氏と、日本でフランスを中心にしたヨーロッパ思想・文学研究に携わる西谷氏とが、互いのポジションの差異を確認しつつ、繊細な問題を原理的に論じる形になっている。扱われている事柄は広範囲かつ多岐に渡っているが、問題になっているのは我々を規定している知の問題であり、その問題を読み解くために必要なものは何なのか、という問いかけである。

まず二人の対話で問題にされるのは、酒井氏が「西洋への回帰」と呼ぶ事態である。世界化という事態は、普遍性を僭称する西洋の非西洋の支配として機能しながら、逆説的にも非西洋の人々に近代的知を持つことやその議論に参入することを可能にした。とりわけ世界化が一気に進んだ第二次世界大戦後では、「近代性」は決して特定の人種や民族、地域に限定されるものではなくなった。それゆえにその近代性を「西洋」の核として信奉していた人々は、自らの「西洋」という超越性が揺るがされ、「西洋」の同一性を確認し固執するという反動化が近年強くなっているというのである。

と同時に、近代社会が目指すの理念としての国民国家概念も揺るがされる事態に至っていることを二人は指摘する。加速化した世界

化は、各国民国家がもはや自立した主権国家として機能しえないことを露呈させてしまったからである。唯一米国だけがその超大国性を背景に自己充足的な国民主義イデオロギーを自家撞着的に遂行しており、自らの宗主国性の責任と歴史を否認し続ける日本は、米国の欲望に追従し、自らの差別的な国民主義イデオロギーに強迫的に固執することで世界化に対応するという事態が起こっている。

こうした世界化とその反動としての「西洋への回帰」や国民主義イデオロギーの強化を批判的に分析するために提示されるのが「翻訳」という行為である。現在では、翻訳される言語は「言語」という一般性において見出される排他的な種差を持つ下位のカテゴリールとして捉えられている。しかし歴史的には、まさに世界化の過程において、翻訳という行為がそうした種差を生み出しつつ、言語の一般性という認識枠組みをも相即的に創出したものにほかならない。近代において、こうした言語に代表される文化的種差性は「西洋」が僭称する普遍性の反照として生まれてきたものである。だからこそ翻訳は、ただ普遍性のレジームに奉仕する消極的で透明な作業ではなく、異質なものの接合や編成が、主体の変容を賭けて繰り広げられる多重的な分節の場としてありうるのだが、ひとたび「制度」となれば、翻訳は先述した種差的な言語間の転換としてだけ捉えられるようになり、翻訳が最初に持っていた様々な問題や多元性は忘却されてしまうことになる。

こうした「翻訳」の歴史性・制度性に着目するとき、翻訳はただ言語の問題であることを超えて、日本を含む非「西洋」が経験した世界化一般の問題へと接合されることになる。国民国家の理念に代

表されるような、「西洋」において誕生した近代性をどのように翻訳して移植するかは、非西洋諸国の近代化にとって本質的な問題とされたからである。本書では、そうした「翻訳」のケーススタディとして戦前の日本の思想、とくに西田幾多郎や田辺元の哲学が取り上げられ、非西洋において西洋を越えた普遍性を希求した哲学のその可能性と不可能性が論じられている。

こうした原理的な議論を踏まえつつ、哲学から文学、世界政治から移民問題、宗教や世俗化の問題、ナショナリズムやクレオール、そして国民教育の問題などへと多岐にわたって繰り広げられる議論は、「現在」に強く介入しようとする意識に強く裏打ちされているため、こうした小文ではカバーできないほど示唆に富む論点が数多く提示されている。こうした刺激的な対話が可能になったのも、単に二人のポジションに差異があるというだけでなく、「近代」が持つそれ自身の制度を内破しつつ更新していくアナキズムに賭ける酒井氏と、近代化によって打ち捨てられてきた人間の社会性や属性に視点を置きつつ近代性を捉え返そうとする西谷氏とのアプローチの違いによるものだろう。もちろん米国と日本、フランスと日本を軸に語られる本書の〈世界史〉と「世界化」の問題は、そのポジションが変われば、また異なる容貌を見せるに違いないだろうが、本書における対話者のポジションの拘束性は、決して議論の限定性にはなっていない。むしろ展開されている様々な議論に、様々なポジションに位置するものが介入出来るべく、徹底した対話性へと開かれており、そうした意味でも、本書は〈世界史〉の解体が実践されている。

(李孝徳)